

重い十字架背負い盛期へ

かつて湖産の数釣りに沸いた福井県の日野川・(日野川漁協管内)。中部や関西の年配友釣りファンにはおなじみの川だったが、このところ沈黙を保ったままだ。今年はアユの年券値下げという奇策とともに放流種苗は海産系人口産 1 本に絞った。これがやっと機能し始めそうなのが、これからの水温が上昇し始める時期だ。好調の兆しが見え始めていると聞いて、7月31日、同川を訪れてみた。(柳沢研二)

夏の寂しい光景

「20年ほど前までは解禁直後となると、日券を求める長い列ができました。警察官が交通整理に出たほどの人出だったのにね」と、日野川のほとりにある漁協今庄支所(南越前町)で、篠田裕彦副組合長(69)は、語り始めた。看板ポイントである支所前には釣り人が2人だけと、日曜にしては寂しい。近くにある大鶴目橋に立ってみた。下流に2人いるが、次々とサオが曲がり、18cmサイズが流れから躍り出る。橋下の底石には、アユがギランギランと反転し、また掛かった。ただ、流れはダム河川にありがちな、くすんだ色だ。05年、上流部に柵谷ダムが完成。30年以上前からある広野ダムの2倍近い総貯水量だという。

仲倉さんの1日

真下にいる麦わら帽の男性に声を掛けるとわざわざ橋の上まで来てくれた。地元の仲倉栄治さん(78)で、毎日、この橋へ自転車で通っているという。お昼は土手を上がって、いったん自宅へ。ここに来て、のんびりやっても20匹ぐらいは出るようになったね。昔の湖産と違って遊びアユも多いので釣るのは大変だけどと仲倉さん。釣りのほかに仲倉さんはやらなければいけないことがある。川のごみ掃除。川岸はもとより水中の障害物まできっちり回収。「自分の遊び場は自分でキレイにしないとね」と仲倉さん。帰るときには岸にある石を川へ放り込むのだという。ちょっとやりすぎなのかもしれないが、これはアユ



が着く玉石が少しでも増えればという思いからだという。砂で埋まり気味の状況を見かねて、ブラシでゴシゴシと石を磨く年配者までいるのだとか。外来者の入れ掛かりを見ながら「わざわざ遠くから来ている人の邪魔はできないね。昼からちょっと2~3時間やろうかな」と帰宅した仲倉さん。





早々と20匹超

さらに上流にある大門橋下流には岐阜ナンバーの車。H時までには岐阜市の男性は「20匹は超えたよ。やっと、この川が目覚めたのかな」と目の前で2連発。強烈な日差しを浴びて流れから飛び出すアユ。八乙女頭首工流にいたのは越前市の♪川義弘さん(50)で10匹クリア。この日は17~cm20匹の釣果だったと、う。坪川さんは「仲間たちも20匹前後が多い、などとポツリ。午後3時すぎ、再び倉さんの元へ。「あすお寺さんへ行くので、早めに上がるね」。釣果は3時間で18cmサイズを3匹。昔はね100匹ぐらい当たり前だった。でも、これが現実だね」と流れを見やった。「ダムができてから水質は確かに悪くなった。それでも私はここで釣るしかない。こんな川になってもうまく付き合っていかなあかんぞな」とつぶやいた。

ダムができて

ダムができるのに伴い漁協には補償金が3億6,000万円よ渡ったという。「これも組合員への分配や各種施設、赤字補てんなどで、もう底をつきかけています」と篠田さん。さらに「アユの生態に詳しい高橋勇夫さんなどに潜水調査してもらいましたが、底石は埋まり気味でアユをはぐくむには厳しい環境という指摘を受けました」という。

釣り人側からすれば、取り返しの付かないものを失ってしまったのかもしれない。ダムが完成する前にここを訪れたことがある私も寂しさを感じられずにはいられなかった。まもなく海産のスイッチが入り、釣果は上向くだろう。ただ、底石の状況などから往年のような大爆釣は望めない。篠田さんは「ダムができたら川が死にますよと言われていましたが…。こうなったのは当然、漁協の責任もあります。でも、釣り人に忘れ去られる前に見せ場をつくりたい」と力を込めた。ダムという重い十字架を背負って、かつての名川・日野川が盛期に突入する。

年券9000円に値下げ

今季、友釣り年券を12,000円から9,000円に値下げ。日券は3,000円のまま。「不振ミ続きファンへのおおびの意味も込めてです」と話す篠田さん。バブル期にはアユだけで約5,000万円の遊漁料収入があったという。昨年の遊漁料は700万円だったという。「値下げは厳しいのですが、何とかファンを取り戻したい」と話していた。

湖産に見切り！将来は日野川ブランドを

「琵琶湖産が入らないのは！漁協始まって以来」と篠田さん。同漁協は直営の中間育成池で放流魚を育てて放流している。昨年は解禁ダッシュを狙って湖産をメインに据えたが不発だった。「池でも冷水病による大量死があるなど歩藪留まりが悪かった。解禁してからもさっぱり」と篠田さん。9月近くになって残った海産系の大型が出たという。坪川さんも昨年、この川で尺を仕留めた。「初期は厳しくても盛期から期待できる海産系一本に絞りました」と篠田さん。これは福井県産と呼ばれる九頭竜川で秋に採捕された親魚をルーツに持つ人工産。

さらに今春、県が日野川に遡上(そじょう)した一番アユ約 2,000 匹を特別採捕。「将来、日野川ブランドのアユができれば」と篠田さんは期待する。同漁協管内の網解禁は9月11日正午。「海産系で釣期が長くなるので、将来は遅らせることも考えています」とも話していた。

ポイント紹介



比較的、好調なのが大門橋から八乙女地区にかけて。台波橋上流は左岸の河原に乗り入れられ、大きな駐車スペースもある。大鶴目橋上流500mには右岸に芝生公園があって、駐車場やトイレもある人気ポイント。各所に入川口や駐車スペースを知らせる看板があるので参考に。定番だった北陸道・南条サービスエリア裏は不調だという。アユのサイズは17~20cmといったところ。底石はアユに磨かれて黒光りした医師とそうでない医師がはっきり分かれる。これをきっちり見分けて探ることが重要。チャラなどの浅羽がほとんど手付かずなので、勝負が早い。水深のあるトロは砂で埋まっている

ケースもあるので注意を。海産系は夕方に入ると一気にスイッチが入ることが多い。きれいに磨かれた瀬肩があれば期待できるぞ。